叢書

#51

かながわけんきょうどしりょうしゅうせい

神奈川県郷土資料集成

かながわけんとしょかんきょうかい

作者:神奈川県図書館協会

成立:昭和32年(1957)-

叢書解題

神奈川県図書館協会の事業として昭和32年の発刊以来、現在第13輯まで刊行が進んでいる。第１輯の凡例には「『神奈川県郷土資料集成』は県下各図書館所蔵の郷土資料（近世）を主軸として汎く各方面からのそれを蒐集し、逐次刊行することを目的とする」とあり、郷土資料の覆刻や翻刻を続けてきた。本叢書で初めて活字化された文献も多い。

構成及び各巻解題 [K08/1]

第１輯　地誌篇（昭和32年２月発行）

明治期の県地誌と郡地誌で、主に教科書として使われたものを覆刻している。県地誌５編、郡地誌５編（三浦郡･橘樹郡･足柄下郡･鎌倉郡･高座郡）を収録。

第２輯　開港篇（昭和33年３月発行）

嘉永６年（1853）及び翌年のペリー艦隊来航時の記録３編、安政６年（1859）横浜開港以後の記録11編（横浜商人の記録、開港当初の横浜町勢、日記･紀行、案内記）を収録する。開港当初の有力貿易商・中居屋重兵衛の日記「昇平日録」を含んでいる。巻末に開国･開港関係の文献目録を付す。

第３輯　俳諧篇（昭和34年３月発行）

近世相模の代表的俳人の句集15編を収録。各集の解題を執筆した石井光太郎の著作「俳諧系譜」「俳人名彙」「相模俳書目録」を併載している。

第４輯　神奈川県皇国地誌残稿 上巻（昭和38年３月発行）

第５輯　神奈川県皇国地誌残稿 下巻（昭和39年３月発行）

明治政府が編纂を企図し、全国の郡村に提出を命じた「皇国地誌」は完成に至らず、その原本も関東大震災で焼失した。しかし地方によっては提出原稿の複本や草稿あるいはその写本が保存されていた。本書は県内に残存する10郡147か村の村誌を上･下２巻に収録する。これは当時の県内町村数（後に東京都に移管された三多摩地区を除く）の約20％に当たる。上巻519頁、下巻843頁の大著である。付録として新旧地名対照表、総目次を掲載。

（「#48　皇国地誌」参照）

第６輯　相模国紀行文集（昭和44年３月発行）

これまで未刊の江戸時代の紀行文を中心に、既刊でも入手しがたいもの若干を加えて全23編を収録する。巻末に神奈川県関係江戸時代紀行文一覧及び索引（本文中の地名･名所･旧蹟･仏閣･名物等）を付す。

第７輯　紀行篇　続（昭和47年３月発行）

江戸時代の道中記や案内記等、紀行文に類したもの12篇を選んで収録する。県内の東海道や観音札所、金沢、三浦、江の島、箱根などが書かれている。

第８輯　和歌篇（昭和50年３月発行）

小田原藩主･大久保忠真の「春鶯集」神奈川三宝寺住職･弁玉の「由良牟呂集」など、近世武相の代表的歌人の歌集（刊本）５編を覆刻収録する。

第９輯　案内誌篇（昭和53年３月発行）

主として明治中･後期刊行の県内各地が紹介されている案内記･繁盛記に類するもの12篇を選んで収録する。

第10輯　絵草紙篇（昭和58年３月発行）

江戸末期の絵入りの滑稽紀行小説、いわゆる膝栗毛もののうちから、現在の神奈川県内を舞台とするもの５編を選び、原本の挿絵もすべて入れて翻刻している。江戸町人の目で見て描写した当時の街道筋の風俗や横浜･箱根･鎌倉･江の島の賑わいなどがうかがわれる。巻末に『神奈川県郷土資料集成』既刊分の総目次を掲載。

第11輯　地誌篇　続（昭和59年８月発行）

第１輯の続篇として教科書を主とする明治期の県内地誌９編を収録する。原本の体裁を再現するため、一部縮尺の変更を加えたところがあるほかは、ほぼ忠実な複製となっている。

第12輯　神奈川県皇国地誌 相模国鎌倉郡村誌（平成３年１月発行）

関東大震災で焼失したとされていた「皇国地誌」原本のうち、焼失を免れて東京大学総合図書館の所蔵となっていた「相模国鎌倉郡村誌」４巻を覆刻したもので、鎌倉郡全89か村を収録する。巻末に新旧地名対照表を付す。

（「#48　皇国地誌」参照）

第13輯　神社明細帳（三浦郡）（平成10年９月発行）

明治政府は地方の実情を掌握するため、府県を通じて種々の調査を実施したが、「神社寺院明細」についても明治12年12月までに詳細な調査を行うよう通達が出された。神奈川県でも神社、寺院、境外、遥拝所、招魂社、祖霊社を対象に調査を行い、「神社明細帳」及び「寺院明細帳」に分けて調査報告が作成された。本書は、これまでに確認されている明細帳５点のうち「神社明細帳（三浦郡）」を編集･覆刻したものである。